



「此方に構つて呉れては困る。折角支度も爲たのだらうに、其を僕の爲に廢させるのは本意で無い。だから途中まで行くとして……。」

正作が熱心に引變へて、何うでも主義の吉井は一向呑氣なもの、

「博覽會は七月まで有るから、強ち今日に限つた事も無いさ。」

「然し僕だつて少くも五十迄生きてゐる意だから、今日に限つて君を引留めるには及ばんと思ふ。」

「變だねえ、可厭に七難しい事はかり並べるとやないか。其では斯うしやう、此處は一つ妥協して、二人で何處かへ散歩に行かう。然うすればお互に思ふ幾分かを實行して、まあ事も無く治まるといふものだ。」

正作は腕組を爲て「否、其妥協といふ事が悪いんだよ。」

「何故？」

「人間といふ奴は無事に治るなぞといふ考があるから、平常物事が徹底せずに、宙ぶらりんに成つて了ふんだ。降参するなら未だ可い、然し妥協は可かんよ、妥協は臆病だ。」

「又お株が出て來たな。然し臆病だつて可いちやないかね。」

「唯人間ちや向上しないばかりさ。」と正作は勢よく言つた。

吉井は一笑して「君の庇理屈にも實に感心する、意外な處で理屈をつけて見たがるから、然し君は細君や子供の前でも那樣事を言ふのかい。」

今迄意氣盛であつた正作は、是を聞くと急に苦い顔を爲て、

「家内や子供？ あ、然うだ、家内や子供が僕に斯ういふ事を教へて呉れるのだ。」

泣きたい程辛い思で言つたが、吉井は猶且軽く打笑つて、腹の中では「飛んだ變り者だ」と思つてゐる。

【中絶】



小説窮

死

(春帆畫)

國木田獨歩

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も臆である。

先客の三人も今來た一人も皆な土方か立んぼう位の極く下等な労働者である。餘程都合の可い日でないといふ馬も碌々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果かつたと見えて思ひ／＼に飲つて居た。

「文公、そうだ君の名は文さんとか言つたね。身體は如何だね。」と角張つた顔の性質の良そうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

「難有う、どうせ長くはあるまい」と今來た男は捨ばちりに言つて、投げるやうに腰掛に身を下して、兩手で額を押へ、苦しい咳息をした。年頃は三十前後である。

「そう氣を落すものじやアない、しつかりなさい」と此店の亭主が言つた。それぎり誰も何とも言はない。心のうちでは「長くあるまい」と云ふのに同意をして居るのである。

「六錢しか無い、これで何でも可いから……。」と言ひさして、咳息で食はして貰ひたいといふ



言葉が出ない。文公は頭の髪を両手で握かんで悶いて居る。
 「苦るしさうだ、水をあげやうか。」と振り向いた。文公は頭を横に振つた。
 「水よりか此方が可い、これなら元氣がつく」と三人の一人の大男が言つた。此男は此店には馴染でないと思つて先刻から口をきかなかつたのである。突きたしたのが白馬の林。文公は又も頭を横にふつた。

「一本つけやう。矢張これでない」と元氣がつかない。代價は何時でも可いから飲つた方が可からう。」と亭主は文公が何とも返事せぬ中に白馬を一本つけた。すると角ばつた顔の男が
 「何に文公が拂へない時は自分が如何にでもする。えッ、文公、だから一ツ飲つて見な。」
 それでも文公は頭を押へたまゝ黙つて居ると、間もなく白馬一本と野菜の煮物を少ばかり載せた小皿一つが文公の前に置かれた。此時やつと頭を上げて
 「親方どうも濟まない。」と弱い聲で言つて又も咳息をしてホッと溜息を吐いた。長顔の瘦こけた顔で、頭は五分刈がそのまゝ伸る丈のびて、もくもくやになつて少の光澤もなく、灰色が、つて居る。

文公のお陰で陰氣勝になるのも仕方がない、しかし誰もそれを不平に思ふ者はないらしい。文公は續けざまに三四杯ひつかけて又たも頭を押へたが、人々の親切を思はぬでもなく、又た深く思ふでもない。まるで別の世界から言葉かけられたやうな氣持もするし、うれしいけれど、それが、それまでの事である事を知つて居るから「どうせ長くはない」との感を暫時の間でも可いから忘れたくても忘れる事が出来ないのである。
 身體にも心にも呆然としたやうな絶望的無我が霧のやうに重く、あらゆる光を遮つて立ちこめ

空腹に飲んだので、間もなく醉がまはり稍や元氣づいて來た。顔をあげて我知らずにやりと笑つた時は、四角の顔が直ぐ
 「そら見る、氣持が直つたらう。飲れ飲れ、一本で足りなげやアもう一本飲れ、私が引受るから何でも元氣を加るにやアこれに限つて事よ！」と御自身の方が大元氣になつて來たのである。
 此時、外から二人の男が駆け込んで來た。何れも土方風の者である。
 「とうとう降つて來アがつた。」と叫んで思ひ／＼に席を取つた。文公の來る前から西の空が眞黒に曇り、遠雷さへ轟きて只ならぬ氣勢であつたのである。
 「何に、直ぐ晴ります。だけど今時分の驟雨なんて餘程氣まぐれた。」と亭主が言つた。
 二人が飛込んでから急に賑うて來て、何時しか文公に氣をつける者も無くなつた。外はどしや降である。二個の洋燈の光線は赤く微に、陰影は聞く遍く此煤けた土間を籠めて、荒くれ男の顔顔だけが右に左に動いて居る。

文公は恵れた白馬一本をちび／＼飲み了ると飯を初た、これも赤兒を背負た女主人の親切で饅頭喰つた。そして出掛ると急に亭主が此方を向いて
 「未だ降つてるだらう、止でから行きな。」
 「たいしたことは有るまい。皆様どうも難有う」と穴だらけの外套を頭から被つて外へ出た。最早晴り際の小降である。兎も角も路地を辿つて通街へ出た。亭主は雨が止んでから行きなと言つたが、何所へ行く？文公は路地口の軒下に身を寄せて往來の上下を見た。幌人車が威勢よく駆て居る。店々の灯火が道路に映つて居る。一二丁先の大通を電車が通る。さて文公は何處へ行く？めし屋の連中も文公が何處へ行くは勿論知らないが併し何處へ行かうと、それは問題でない。

何故なれば居残つて居る者の中でも、今夜は何處へ宿るかを決定して居ないものがある。この人々は大概、所謂居所不明、若は不定な連中であるから文公の今夜の行先など気にしないもの無理はない。然し彼の容態では遠らざるつて了うだらうとは文公の去つた後での噂であつた。

「可憐そうに。養育院へでも入れば可い。」と亭主が言つた。

「所が其養育院とかいふ奴は面倒臭くつてなかく入られないといふ事だせ。」

と客の土方の一人がいふ。

「それじやア行倒だ！」と一人がいふ。

「誰か引取人が無いものかナ。全體野郎は何國の者だ。」と一人がいふ。

「自分でも知るまい。」

實際文公は自分が何處で生れたのか全く知らない、両親も兄弟も有るのか無いのかすら知らない、文公といふ稱呼も誰いふとなく自然に出て来たのである十二歳頃の時、浮浪少年との間で、暫時監獄に飼われて居たが、色々の身の爲になるお話を聞かれた後、門から追ひ出れ



窮死

春帆

た。それから三十幾歳になるまで種々な労働に身を任して、やはり以前の浮浪生活を續けて来たのである。此冬に肺を患でから薬一滴飲むことすら出来ず、土方にせよ、立坊にせよ、それを休めば直ぐ食ふことが出来ないものであつた。

「最早だめだ」と十日位前から文公は思つてゐた。それでも稼げるだけは稼がなければならぬ。それで今日も朝五錢、午後六錢だけ漸く稼いで、其六錢を今めし屋で費つて了つた。五錢は晝めに成て居るから一文も残らない。

さて文公は何處へ行く？。茫然軒下に立て眼前の此世の様を熟と見て居る中に、「ア、寧ろ死で了ひたいなア」と思つた。此時、悪寒が全身に行きわたつて、ぶるぶると慄へた、そして續けざまに苦しい咳息をして噓入つた。

ふと思ひ付いたのは今から二月前に日本橋の或所で土方をした時知り合になつた辨公といふ若者が此近處に住で居ることであつた。道悪を七八丁飯田町の河岸の方へ歩いて闊い狭い路地を入ると突當に薄鐵葺の棟の低い家がある。最早兩戸が引よせてある。

「辨公、家か。」

「誰だい。」と内から直ぐ返事がした。

「文公だ。」

戸が開て「何の用だ。」

「一晚泊めて呉れ。」と言はれて辨公直ぐ身を横に避けて

「まアこれを見て呉れ何處へ寝られる？」見れば成程三疊敷の一室に名ばかりの板間と、上口に漸く下駄を脱ぐだけの土間とがあるばかり



り、其三疊敷に寐床が二つ敷てあつて、豆洋燈が板間の箱の上に乗てある。其薄い光で一ツの寐床に寐て居る辨公の親父の頭が朧に見える。

「常例の婆々の宿へ何故で行かねえ？」

「三晩や四晩借りたつて何だ。」

「ウンと借が出来て最早行ねえんだ。」と言ひ様、咳息をして苦しい息を内に引くや思はずホツと疲れ果た嘆息を洩した。

「身體も良く無いやうだな。」と辨公初て氣がつく。

「すつかり駄目になつちやつた。」

「そいつは氣の毒だなア」と内と外で暫時無言で衝突して居る。すると未だ寝着れないで居た親父が頭を擡げて

「辨公、泊めて遣れ、二人寝るのも三人寝るのも同じことだ。」

「同じことは一こつた。それじゃア足を洗ふんだ。この磨滅下駄を持って其處の水道で洗らつて來な。」と辨公景氣よく言つて、土間を探り、下駄を拾つて渡した。

其處で文公は漸と宿を得て、二人の足の裾に丸くなつた。親父も辨公は晝間の激しい労働で熱睡したが文公は熱と咳息とで終夜苦しめられ曉天近くなつて漸と寝入つた。短夜の明け易く四時半には辨公引窓を明けて飯を焚きはじめた。親父も間もなく起きて身仕度をすする。飯米が出来るや先づ辨公は其日の辨當、親父と自分との一度分を作へる。終つて二人は朝飯を



食ひながら親父は低い聲で

『此若者は餘程身體を痛めて居るやうだ。今日は一日そつとして置いて仕事を休ます方が可からう。』

辨公は頬張て首を縦に二三度振る。

『そして出がけに、飯も煮いてあるから勝手に食べて一日休めと言へ。』

辨公はうなづいた、親父は一段聲を潜めて

『他人事と思ふな、乃公なんぞ最早死なうと思つた時、仲間の者に助けられたなア一度や二度じやアない。助けて呉れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。』

辨公は口をもごくしながらか親父の耳に口を寄せて

『でも文公は長くはないよ。』

親父は急に箸を立て、睨みつけて

『だから猶は助けるのだ。』

辨公は又も從順にうなづいた。出がけに文公を揺り起して

『オイ一寸と起ねえ、これから我等は仕事に出るが、兄公は一日休むが可い。飯も炊てあるから

ナア、イ、カ留守を頼んだよ。』

文公は不意に起されたので、驚いて起き上がりかけたのを辨公が止めたので、又た寝て、その言

ふことを聞いて唯だうなづいた。

餘り當にならない留守番だから兩戸を引よせて親子は出て行つた。文公は留守居と言はれたの

で直ぐ起きて居たいと思つたが轉つて居るのが結極樂なので十時頃まで眠だけ覺めて退き上らう

とも爲なかつたが、腹が空つたので苦しいながら起き直つた。飯を食つて又たごろりとして夢現



で正午近くになると又た腹が空る。それで又た食つてごろつた。

辨公親子は或親分に屬して市の埋立工事の土方を稼いで居たのである。辨公は堀を埋る組、親父

は下水用の土管を埋る爲の深い溝を掘る組。それで此日は親父は溝を掘て居ると午後三時頃、

親父の跳上げた土が折しも通りかゝつた車夫の脚にぶつかつた。此車夫は車も衣装も立派で乗せ

て居た客も紳士であつたが、突如人車を止めて、『何をしやアがるんだ』と言ひさま溝の中の親父

に土の塊を投つけた。『氣をつける、間拔め』といふのが捨臺詞で其儘行かうとすると、親父は承

知しない。

『此野郎!』といひさま道路に這ひ上つて、今しも梶棒を上げかけて居る車夫に土を投つけた。

そして

『土方だつて人間だぞ、馬鹿にしやアがんな』と叫びんだ。

車夫は取返して、二人は握合を初めたが、一方は血氣の若者ゆえ、苦もなく親父を溝に突き落

した。落ちかけた時、調子の取りやうが悪かつたので棒が倒れるやうに深い溝に轉げ込んだ。そ

の爲め後腦を甚く撃ち肋骨を折つて親父は悶絶した。

見る間に附近に散在して居た土方が集まつて来て、車夫は毆打られるだけ毆打られ其上交番に

引きすつて行かれた。

虫の呼吸の親父は戸板に乗せられて親方と仲間の土方二人と、氣拔のしたやうな辨公とに送ら

れて家に歸つた。それが五時五分である。文公は此騒に屹體して隅の方へ小さくなつて了つた。

間もなく近所の醫師が来る事は來た。診察の型だけして『最早瓜がない。』と言つたきり、そこそ

こに去つて了つた。

『辨公毅然しな、俺が必然仇を取つてやるから。』と親方は言ひながら財布から五十錢銀貨を三四



枚取り出して『これで今夜は酒でも飲んで通夜をするのだ、明日は早くから俺も来て始末をしてやる。』

親方の去つた後で今まで外に立て居た仲間の二人は兎も角内へ入つた。けれども坐る處がない。此時辨公は突然文公に

「親父は車夫の野郎と喧嘩をして殺されたのだ。これを與るから木賃へ泊つて呉れ。今夜は仲間と通夜をするのだから」と貰つた銀貨一枚を出した。文公はそれを受取つて、

「それじやア親父さんの顔を一度見せて呉れ。」

「見ろ。」と言つて辨公は被せてあつたものを除たが、此時は最早薄闇いので、明白しない。それでも文公は熟と見た。

飯田町の狭い路地から貧しい葬儀が出た日の翌日の朝の事である。新宿赤羽間の鐵道線路に一人の轢死者が発見つた。

轢死者は線路の傍に置かれたまゝ薦が被けて有るが頭の一部と足の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は血にまみれて居た。六人の人がこの周圍をウロウロして居る。高い堤の上に見守の小娘が二人と職人體の男か一人、無言で見物して居るばかり、四邊には人影がない。前夜の雨がカラリと晴つて若草若葉の野は光り輝いで居る。

六人の一人は巡査、一人は醫師、三人は人夫、そして中折帽を冠つて二子の羽織を着た男は村役場の者らしく線路に沿ふて二三間の所を往つ返りつして居る。始終談笑して居るのが巡査と人夫で、醫師はこめかみの邊を兩手で押へて蹲居んで居る。蓋し棺桶の來るのを皆が待つて居るの

である。

「二時の貨物車で轢かれたのでしよう。」と人夫の一人が言つた。

「その時は未だ降つて居たかね？」と巡査が煙草に火を點けながら問ふた。

「降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過ぎでした。」

「どうも病人らしい。ねえ大島様。」と巡査は醫師の方を向いた、大島醫師は巡査が煙草を吸つて居るのを見て、自身も煙草を出して巡査から火を借りながら、

「無論病人です。」と言つて轢死者の方を一寸と見た。すると人夫が

「昨日其處の原を徘徊して居たのが此野郎に違ひありません。たしかに此の外套を着た野郎です。ひよろ／＼歩いては木の蔭に休んで居ました。」

「そうすると何だナ、矢張死ぬ氣で來たことは來たが晝間は死ねないで夜行つたのだナ。」と巡査は言ひながら疲勞れて上り下り兩線路の間に蹲んだ。

「奴さん彼の雨にどし／＼降られたので如何にもかうにも忍堪きれなくなつて其處の堤から轉り落ちて線路の上へ打倒れたのでせう。」と人夫は見たやうに話す。

「何しろ憐れむ可き奴サ。」と巡査が言つて何心なく堤を見ると見物人が増えて學生らしいのも交つて居た。

此時赤羽の流車が朝暈を真ともに車窓に受けて威勢よく駛つて來た。そして火夫も運車手も乗客も皆な身を乗出して薦の被けてある一物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通り假埋葬の處置を受けた。これが文公の最後であつた。

實に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うにもやりきれなくつて倒れたのである。【七九】